

特別対談

尖閣は明らかに日本の領土だ

李 登輝
元台湾総統
中嶋嶺雄
国際教養大学理事長・学長

李登輝 今日日本の皆さんが非常に強い関心をお持ちだと思うので、尖閣諸島の問題からお話ししましょう

う。これは小さい島の問題のように見えて、実は非常に大きな問題。日本が独立国であるか否か、また憲法にまでかかわってくる問題です。

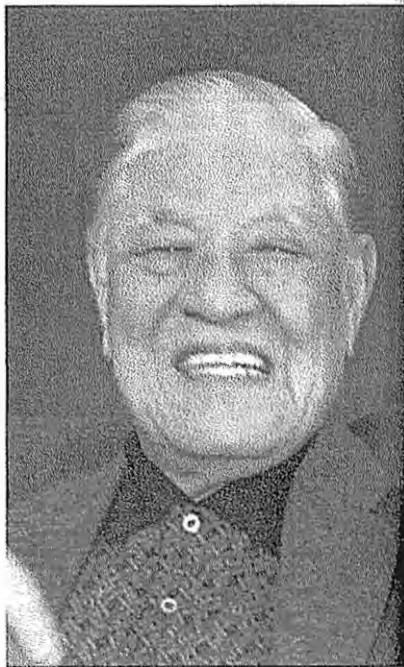
中嶋 全くそのとおりですね。

李 台湾では一九七二年、当時職業学生として国民党から海外派遣されていた

馬英九総統が「尖閣は台湾のものである」という論文を書いています。

また、民進党のなかでも「尖閣諸島は台湾のものである」と言う人間もいますし、台湾の一般国民にも「尖閣諸島は台湾の領土だ」と主張する声があります。しかし、尖閣諸島は日本の領土です。私は昔からそう言ってきた。

中嶋 これは日本国民が非常に勇気付けられる発言ですね。李登輝元総統が尖閣諸島は日本のものだとして明確に発言されることは、日本のために



も、台湾のためにも、アジア全体のためにも非常に意味が大きい。

李 私がこんなことを言うと、日本人のほうがかわこわとした顔をするんですよ。一昨年、沖縄に行った時に県知事と食事をしながら「尖閣は沖縄のものだ」と言ったら、県知事が黙ってしまった。これはおかしい。日本人は国を愛していないのかとびっくりしました。

もちろん、台湾でも私の発言に眉をひそめる人はいます。最近も「Face to Face」というテレビ

番組で六人の言論人と話をし、「尖閣諸島は日本のものだ」として歴史的な根拠も話しました。すると番組を見た私の若いファンから、インターネット上で反応がありました。「何を言っているんだ！ 尖閣は台湾のものだ！」と。

私は言ったんです。「台湾のものだ」というなら、根拠を示さない。何を根拠にしているのか」と。すると、みんな黙ってしまう。中国の主張もそうですが、根拠がないのですよ。

日本と台湾の間にある尖閣での問題は漁業の部分だけで、日本の農水省漁業局とある程度話を付けて双方が漁をできるようにすれば問題はなくなる。問題の発端はそこにあります。

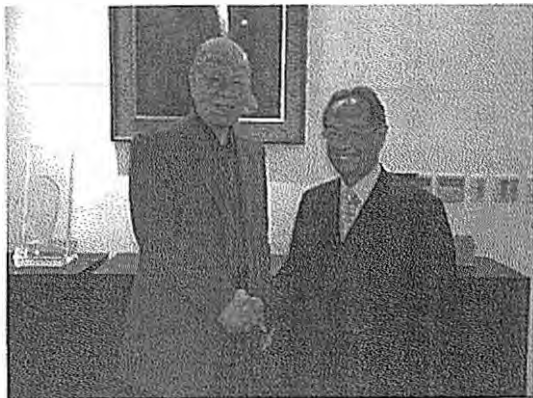
した。だから、政治屋がわいわい騒いでも、漁民さえそれに乗らなければいいという形で、私はこれまで尖閣問題を処理してきたのです。

中嶋 「領土問題」ではなく、「漁業問題」なのですね。

尖閣とともに漁を

李 少し歴史の話をしましょう。尖閣諸島周辺は昔から非常にいい漁場で、台湾は日本統治時代から近海漁業を行っていました。また、沖縄の漁民も尖閣まで行くのに時間がかかるから、と台湾の基隆（^{キールン}）に住んでいたくらいです。

台湾総督府が毎年刊行していた「台湾の漁業」という本にも、「沖縄政府は漁民と漁船、漁場の管理がうまくできないので、台北州政府（今の台北県、宜蘭県などを含む）に委託した」と書かれています。昔は台湾も沖縄



日台友好が東アジアの安定をもたらす

李 その後、台湾の農業委員会から日本の農林水産省に「台湾の漁民にも漁業を認めてもらえないだろうか」と相談しました。そのお達しは生きて、台湾の漁民は尖閣に上陸はできないけれど、周辺で漁をすることは認められていたのです。

編集部にもかかわらず、抗議活動は活発でした。九〇年には台湾船二

尖閣へも漁に出ていたのです。

当然、尖閣諸島は沖縄と一緒にアメリカの占領下にありましたが、当のアメリカは漁業のことまで気にしていませんでした。だから、台湾の漁民は戦後もしばらく漁を続けていたのです。

しかし一九七二年、佐藤内閣の時に沖縄が返還されると、尖閣は日本

も同じ国内だから、何も問題なかったんです。こういうことをあまり今の人は知らないんだね。

編集部 日本人の大多数の人々は、今回の尖閣事件で、やっと尖閣諸島の持つ意味を認識した、というくらいだと思います。

李 戦後、沖縄がアメリカに占領されてからも、台湾の漁民は依然として尖閣へ魚を取りに行っていたんです。特に蘇澳あたりに漁港を作って、漁民はあちこちに出かけていましたから、基隆の漁民と一緒にあって、尖閣へも漁に出ていたのです。

その声が強くなってきたのは私が台湾市長、副総統、総統をやっていた時期ですから、何とかしなければと思っていました。

領土ですから、台湾の漁民が魚を取りに行くことが国際法違反とされるようになった。漁民が漁をするために尖閣に近づいて領海侵犯をしてしまい、日本側が追い払う、というようなことがたびたび起こったのです。

しかし漁業や農業はいわゆる慣習法が非常に大切で、たとえば農業でも川の水を利用する際、環境が多少変わっても、厳密な法律ではなく、慣習法として今までと同じ権利が残されるものです。にもかかわらず、今までどおり漁をしただけで「領海侵犯だ」といわれてしまったのは、台湾の漁民に戸惑う部分もあったでしょう。それが抗議の声になった。

中嶋 台湾の活動家が「尖閣は台湾のものだ」と声を挙げ始めたのは、八〇

隻が魚釣島周囲の領海を侵犯。九六年七月に国連海洋法が発行し、日本が排他的経済水域を設定すると、九月、十月と香港や台湾の活動家が領海侵犯しています。以来、周辺海域での断続的な抗議活動が行われていきます。

香港反日派の動き

中嶋 香港から台湾へやって来て活動をしている、とのお話でしたが、この人たちには、反日運動を行う歴史的背景が存在しています。

一九四一年十二月に日本軍の香港島攻略が行われた際、香港義勇兵を含むイギリス軍と日本軍とともに現場での判断を誤り、酸鼻を極める戦況状態に陥りました。この時、香港攻略左翼隊長だった田中良三郎大佐は、戦後東京裁判にかけられ、BC級戦犯として二十年の刑を下されています。当時の香港攻略作戦の日本

「九〇年代にかけてですね。

李 「台湾の活動家」と言っても、実体は香港からやってきた「愛国同心会」という中台統一を唱える急進的なグループで、彼らが尖閣を持ち出したのです。そこへ当時の国民党政府の一部が乗っかってしまった。私の総統時代にも、海軍が漁船を保護すると言って尖閣の近くまで船を出したことがあります。

中嶋 当時、日本は竹下内閣でした。外務省のアジア局長から私に電話があり、「これから竹下首相がお電話をしますので、ぜひ中嶋先生から李総統にお電話してください」といわれました。当時は日台のパイプがほとんどありませんでしたからね。

その日は日曜日だったのですが、李総統は総統府に閣僚を招集して、すぐに漁船の集結を止めさせた、と記憶しています。

側参謀は、瀬島龍三氏だったのです。そして香港陥落の十二月二十五日は、日本軍国主義への告発を込めて「香港の黒いクリスマス」と今でも語られているほどで、これが反日の芽になっていた。

さらに、私は六九年から七一年まで香港総領事館にいましたが、七〇年の暮れから七一年にかけて、香港で初めて尖閣をめぐる反日デモが行われています。

これは「香港索償協会」その他の団体が組織したデモで、日本軍政下で当時の額で約三億円の軍票が出されたのですが、それを強制的に香港ドルと換えさせたことに對する補償を求めるものでした。以降、日本に對する抗議に尖閣諸島問題が加わり、反日キャンペーンの色が強まっていたのです。

こういった背景を背負う香港で誕生した「愛国同心会」などの反日ゲル

「プが台湾にやってきて」「尖閣諸島は台湾のものだ」と叫び、上陸を試みているのです。

李 私の主張が気に入らないのか、この連中は私が引退してから自宅近くへやってきて、何か叫んでいるようです。暴力行為に出ようとしたこともあります。群衆がそれを許さず、返り討ちにあっていましたよ。

中国の強かな外交

中嶋 先ほど、李登輝さんが「台湾にも中国にも尖閣領有の歴史的根拠はない」と指摘されましたが、まさにそのとおりなのです。

尖閣諸島の領有権を中国が主張し始めたのは、一九七一年。初めて「外交部声明」として、「釣魚島（尖閣諸島）は中国の領土である」と発表しています。これは、六八年に国連アジア極東経済委員会（ECAFE）の海洋調査で尖閣諸島に豊富な海底資源があることが明らかになったからです。

中嶋 今回の尖閣事件の流出ビデオの映像はご覧になりましたか？
李 ぶつかったシーンの写真は見ましたが、テレビでは見ていません。最近テレビは見ないことにした。偏りすぎているし、ウソばかり流すから（笑）。

「指導者不在」の日本

中嶋 あれを見ると、いかに今回の事件が中国によって作られたものか、歴然とわかります。ところが、民主党政権は船長を釈放したうえ、映像を一般公開しなかったため、国民は政府の弱腰の対応に強い怒りと不満を感じていました。海保の一職員の手で、映像は流れましたが。

李 この件ではアメリカのクリントン国務長官が「尖閣は安保条約の範囲内」と発言しましたね。さらにスタンバーグ国務副長官も安倍晋三元総理との会議で「日米安全保障条約第五

源があると明らかにした後でした。

しかし、日本は何の抗議もしないまま、七二年に日中国交正常化してしまいました。同時に、日台国交断絶をしたわけですね。後の一九七九年に訪日した鄧小平が言ったのが「尖閣の問題は一時棚上げして構わない。次の世代、また次の世代は我々より知恵があるだろう」。日本政府はこれを聞いて安心して、棚上げしてしまっただけです。

しかし、国交正常化から二十年後の九二年、中国は領海法という国内法を制定し、「台湾及びそこに含まれる釣魚島とその付属の島嶼」、つまり尖閣諸島を中国の領土であると決めています。

この時、日本側は宮澤喜一首相、橋本恕中国大使というまさに「親中」の布陣でした。政府は領海法に何らの抗議をしないばかりか、二カ月後には江沢民が来日。さらにこの年の

衆が適用される」と発言しました。

対して、日本政府の対応については、中西輝政京都大学教授が「菅総理の歴史的な大罪」と書かれましたね。アメリカが顔を出して「安保条約の範囲内」と言っただけでは不十分です。日本政府が自ら「日本の領土だ」と毅然とした態度で言わなければいけない。

この問題において基本的な問題は何かというと、結局は憲法九条に繋がっていく、ということですね。安保の範囲内というのは、アメリカが動かなければ日本の海上自衛隊は尖閣を、さらにいえば自分の国を守れないということになる。領土が侵害されても憲法が反響を許さない、というところからです。

この権限は台湾と同じで、台湾も「台湾関係法」というアメリカの国内法の下で動いているような形になっているんです。

秋には「日中友好」ということで、天皇・皇后両陛下がご訪中なさっているのです。

編集部 狙い済ましたかのような一連の流れですね。非常に強かであるとともに、日本の政治のだらしないが目立ちます。

李 中国は国賓館に「釣魚台」という名前をつけています。表向き「名前は尖閣諸島の「釣魚島（中国名）」とは関係ないとされています。しかし台湾はもちろんのこと、各国の要人がここに呼ばれ、宿泊し、会見などを行っていますから、そのたびに「釣魚台」という名前が報じられることは、非常に有効な宣伝になります。

しかし結局のところ、中国が領有権を主張するのは、「尖閣諸島は台湾のものである。台湾は中国なのであるから、尖閣諸島も中国のものである」という考えなのです。それ以上の根拠はありません。

編集部 日本も台湾も、国家としての主体性にかかわる問題ですね。

中嶋 李登輝さんからは昨年の日比谷公会堂での演説（「WILL」二〇〇九年十一月号、所収）で、「憲法を争点にしないような政治をやっている日本は、やがて沈んでいくだろう」という大変示唆に富んだ教訓をいただきました。今、まさにその通りになりつつあります。

李 今の日本には、まだ本当の指導者が出てきていないのです。以前、アルビニストの野口健さんとお話した時にもそういう話題になりましたが、結局のところ、政治家に大切なのは人民を愛する気持ちなのです。

ところが今の日本には、まだそういう政治家が出ていません。自分の成果ばかりを気にしていて、人民の困難が分かっている人はいません。同胞愛なき政治家は国を滅ぼしますよ。

そして日本国民が苦しんでいる問題を解決してあげることが、今の指導者の一番の仕事です。経済だって、成長率二、三％では国民がかわいそうじゃないか。たしかに今の日本は資源に困っているし、労働者も減ってきている。そういう状態から経済成長を続けるのはたしかに難しいでしょう。

しかし、日本は資源を作り出す知的産業が非常に進んでいます。日本の未来を担う若いエネルギー研究者から、素晴らしい手紙を貰ったこともある（45ページ掲載）。私は何度もその手紙を読み返しました。長らく私が日本の若者に伝えたかったことが全て綴られていた。本当に将来が楽しみなったよ。

そういった日本の明るい将来のためにも、国民の苦難を乗り越える政治をやって問題を解決できれば、国民は手を叩いて支持しますから、その

報が全面に押し出されています。

次期国家主席の最有力候補と言われている習近平については、日本国内では「習近平はソフト路線。国家主席になれば日中関係はさらによくなる」などという向きもあります。しかし、これは大きな間違いだと思います。習近平はいわゆる「太子党」ですし、江沢民に近い保守派だと私は見えています。

李 柔らかに見えるのは戦略で、本心ではない。相手が強く出れば弱く見えるし、相手が下手に出れば上から叩く。こういうやり方をするのが中国です。

日台が抱える病巣

中嶋 日台関係、そして中国を考えた時に、日本はもちろんですが、台湾もぐらついていては困る。近年、尖閣をめぐる抗議活動が活発化しているのも、ハーヴァード大学での博

後、憲法の修正を始めればいい。

誇大妄想の中国

編集部 日本が憲法を改正しようとする、特に中国から強い非難の声や圧力がかけられるでしょうね。
中嶋 そういった事態を考えても、今後はますます日台関係が重要になってきます。

李 そう、何より日台の人民の心の絆を強めることが第一です。そこに中国が割って入ろうとするでしょうが、その時は武者小路実篤の言葉、「君は君、我は我也、されど仲良き」という心境でいればいいのです。交流をしてはいても、「中国は中国、台湾は台湾、日本は日本」とけじめをつけないといけない。

中国人はいかなれば誇大妄想なところがある。これが日本人を圧倒し、黙らせてしまう。するとさらに日本に対して圧力を強めるというのが中

士論文のテーマが尖閣問題だった馬英九総統の国民党政権であるということが影響していると思います。しかし台湾も、間違いなく「民主主義」という価値観の上にしつかり立っていてもらわなければ困ります。

李 台湾の民主化については、今後直面する危機がいくつもあります。その最も大きいものが、今の馬英九政権の政策です。経済交流、経済依存を理由に中国との「統一」に向かうようなやり方では、「経済をもつて統一を促進する」という中国の術の中から抜け出せなくなってしまう。

台湾の前途は二千万の台湾人民によって決めるべきなのです。しかし、人民が向かうべき方向をはっきりさせるのは、指導者の役割でもある。そのためには民進党の力だけでは足りない。国民党その他の力も借りなければならぬでしょう。
中嶋 「台湾党」を作らなければなり

国のやり方です。このやり口を捉えておくことが重要です。

一九九六年、私が初めての直接選挙による総統選に出馬した時には、中国はミサイル発射実験を行いました。しかし、私は連中のやることは分かっていますからね。

当時の国家主席は江沢民ですが、彼は軍の話ばかり聞いて、軍に頼りきっていた。それに比べれば、今の胡錦濤国家主席はまだしも西洋的な考えが頭に入っているようです。

中嶋 胡錦濤、温家宝など共産主義青年団系はまだ話がわかりますね。ところが、昨年行われた建国六十周年の軍事パレードがあった翌日の人民日報の一面には、江沢民と胡錦濤の写真が並べて掲載されていました。これは異常事態と言ってもいいくらい、異例中の異例の出来事で、まだ江沢民が中国共産党内で大きな影響力を持っていることを、人民日

ませんね。

李 私が今考えているのは、いわゆる第三局的な力を持った人たちがグループになり、民進党や国民党を巻き込むような形でやっていけば、台湾の民主化はもう少し早く進むのではないかと考えています。

民進党の中にもいい人材はいまいます。主席の蔡英文氏などは若い女性ですが、非常に優秀です。しかし、総統になるにはまだ少し時期が早い。陳水扁の二の舞になりかねません。国民党には長年揉まれてきた人たちが多くいて、この中から総統を選び、民進党から副総統や行政院長を持つてくるようにするのがいい。

私が十二年間、総統として行った教育改革、司法改革、台湾のアイデンティティの問題などは、まだまだ中途半端です。これらを今後も進めていかなければなりません。また、中国依存の進む経済活動も、中国市

緊急大特集 李登輝氏（元台湾総統）が語る

日本の若き研究者からの手紙

李登輝
元台湾総統

私は、長らく台湾の将来について、国の自主性を維持しつつ、産業構造の改善を主張してまいりました。この構想はエネルギー再生を主要産業とする経済改革であり、また、研究目標でありました。

そのため、エネルギー再生に関する新しい研究室を開設しました。研究室の重要な研究員として、日本から三人の学者を招聘する予定で、候補に上がった三人の方々を、台湾に

招いて、研究室の見聞や環境を見てもらいました。

三日間の短い時間でしたが、愉快で、有意義な滞在を終えて、日本に帰国しました。帰国後、間もなくその中の一人の若い青年から、次にご紹介する丁寧なお手紙を受け取りました。

七枚の便箋に、ぎっしりと、心を込めて書かれてある手紙を私は繰り返し読み続け、感激で胸が一杯にな

り、この文章を皆さんにも、御紹介したいと思いました。

何が私をして、そうさせたのでしょうか。それは長らく私が日本の若い人々に告げたかったこと、そのまを、彼が彼の手紙に書き綴っていたからなのです。日本人の精神、日本文化の伝統、若き人の品格と価値観を持つ若い青年を見たからです。

まず、彼の手紙を読んだから、詳しく説明しましょう。

場だけを相手にするのではなく、グローバルな視点での成長モデルを確立すべきです。
編集部 そのお話は日本にもそのまま当てはまりますね。

日本は「平成維新」を

李 台湾が中国の経済力に寄りかかってしまうと、あたかも日本の地方自治体が国からの補助金に頼っているのと同じ構図になってしまい、抜け出せなくなってしまう。そうならないためには、経済における「台湾モデル」が必須です。

台湾が直面する問題の解決は、二〇一二年の総統選挙にかかっています。目標を達成するためには、人民が大団結し、「馬」を乗り捨てて台湾を守る事が急務です。

そして、日本との関係、アメリカとの関係、そして中国との関係における台湾の態度を明確にさせたうえで

で「台湾憲法」を出す。同時に、国名も「中華民国」から「台湾」に変える。

日本でもようやく一昨年の六月に、東京都の転出入届けに「台湾」の名称で登録することが認められました。さらに日本との関係で言えば、台北と羽田を結ぶ直通便もでき、経済の結びつきもさらに強まっていくはずだ。

現在、日本は大陸に工場を作り投資をしています。これからは台湾との連携を深め、台湾に知識産業を売るような方向へ進むべきです。エネルギー問題も、日本は資源がない分、技術でカバーできる。台湾も技術を促進することができます。

中嶋 日台の関係を深めていくためには、李登輝さんにもまだまだお元気でいていただかないと。そして日本も、もっとしっかりとしなければならぬですね。

李 今の日本を見てみると、政治を

やる人間が、いかにして権力を手にするか、ということばかり考えていて、人民や国のことが頭に入っていないように見える。しかし、「権力」というのは権力者のものではなく、何か決定を下す時に人民から借りて、そのあと返すものです。そのことがわかっていくのかどうか。

また、日本にはいい学者がたくさんいるのですから、つまらない理屈をこねるのではなく、現実的に問題を解決していく気持ちを持ってほしい。今こそ日本は国を挙げて「平成維新」をやらなければなりません。

なかじま みねお

一九三六年生まれ。六〇年東京外国語大学中国科卒業。六五年東京大学大学院国際関係論課程卒業。八〇年東京大学社会科学博士。東京外国語大学長、文部科学省中央教育審議会委員、内閣府教育再生会議委員、才能教育研究委員会幹事。『北京の物語』（筑摩書房）でサントリ基金賞受賞。二〇〇三年「正義大賞」受賞。近著に『全球（グローバル）教育論』（西村書店）、編著に『歴史の壁を突破する一日中近現代史の争点35』（文藝春秋）など。李登輝元総統との共著に『アジアの冒険』（光文社）がある。

〈李登輝 先生

謹啓

台湾にて閣下とご家族に拝謁（はいえつ）できましたことは、至上の光栄でありました。奥方様も決して体調が優れない中、御臨席賜り恐縮の限りです。また、美しい坤儀様（李氏の孫）にお目通り叶いましたことも大きな喜びでありました。若輩たる私への過分な歓迎に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございます。

先日、雪の降り積もる日本に戻って参りました。帰りの機中に於いても、高ぶる心を静めることができないほどに、素晴らしい時間を過ごさせて頂きました。見学させて頂きました研究室は、私の想像を遙かに凌（りやう）駕（か）し、正しく私の理想そのものでした。

これまで、決して十分とは言えない環境で毎日を過ごしてきた私にと

金を元に出席した国際学会に於いて、現在の指導教員に巡り会うことができ、今の大学へと進学する機会を得ました。

現在、私が博士の学位を得ることができたのも、この奨学金のお陰であると考えています。従いまして、これまで受給してきた奨学金の恩に報いる為、その財団の高邁（こうまい）な志を実現すべく、日本の立国へ微力ながらも尽力したいと考えております。

また、奨学金のみならず、今日の私があるのは日本の社会、制度の賜物であると考えています。生活環境や、治安、福祉、経済的な豊かさなど、学問とは関係ない分野に於いて私が享受できた恩に対して、今後、科学技術の発展を通して報いていかなければなりません。その責務を果たさずして、直ちに台湾へ移り住むことは、いかに閣下の御意向（ごいんよう）と雖（い）も、承諾することは叶いません。

つては、あらゆる設備を備えた広大な実験室は、夢に思い描いていたような世界でした。一度でもこのような環境に身を置いてみたいと切望して参りました。何より、多くの方々への御支援が受けられることが、私が渴望（かうが）してきたことであり、正に桃源郷（とうげんきやう）と比すべき環境でありました。閣下より直々に台湾へ来るよう御言葉を頂戴し、直ちに台湾へ移り住み、自分の思うままに研究を進めてみたいという抑えきれない高揚感を感じました。然れども、日本に帰国した後、心を静めて熟慮した末、以下二点の事由から、此度の機会を辞退致したく申し上げます。

「日本のために尽力」

第一に、私はエネルギー再生を志す学生である前に、独りの日本人であります。常々、大学を卒業し、社

まずは、日本の為に我が微力を尽くし、その責務を果たした後に、再び閣下よりお声を掛けて頂く機会あらば、その時こそ、自分自身の望みに従って、エネルギー再生の進展に全霊を尽くしたいと存じます。

「先人達の高邁な志」

第二に、此度の研究環境は若輩たる私にとって、過分な待遇であると存じます。出資者の某先生より、出会う会いこそが運命を切り開いていくと御言葉を頂きました。

確かに、これまで十分な支援を受けることができず、もがき苦しんできた我々エネルギー再生関係者にとって、此度の出会いが、運命を大きく切り開く一大転機となることを確信しております。然れども、私にはこの邂逅（かいこう）が天命であるとはどうしてと思えません。

エネルギー再生の研究者は、これ

会に出た暁には、日本の為に働きたいと考えてきました。確かに、研究面に於いては、エネルギー再生は国からの支援を受けることは出来ませんでした。

しかしながら、大学に於いて学問を修めるに当たっては、日本国政府からの奨学金を受給して参りました。この奨学金は将来の日本への貢献を期待されて支給されたものです。

また、研究に於いて最も苦しかった時期には、幸運にして、民間の財団から、奨学金を受給することができました。この奨学金もまた、資源に乏しい日本の立国とは、即ち技術立国に他ならないとの理念から、研究分野に関わらず、科学技術を志す学生に支援を続けてきたものです。

私はこの奨学金を受給できたことで、エネルギー再生の研究を継続することができ、さらには、この奨学

まで皆無にはば等しい支援しか受けることができませんでした。しかし、そのような不遇の中にあつて、この二十一年間に多くの成果が積み重ねられたのは、偏（ひとへ）に研究者の不断の努力によるものです。困窮する環境の中、学会を先導してこられた先生方が重ねてきた努力は、私には及びもつかないものです。

エネルギー再生の研究を継続できず、職を追われた後、自ら資金を得て研究所を設立するべく、半導体基板の会社を起業した先生もおられます。既に一億円以上の資金を得て、研究所の設立へ邁進（まいしん）しておられます。

そもそも、私がエネルギー再生に身を投じたのは、現象そのもののへの興味ばかりではなく、かような先人たちの堅忍不拔（けんじんふたつ）の高邁な志に胸を打たれたからに他なりません。先人が大変な苦勞を重ね、現状を打破しようとして暗中模索している最中に、私だ

けがそれを出し抜き、幸運を享受することは決してできません。

エネルギー再生に限らず、日本国内には必死に働きながらも、苦しい生活を強いられている方々が大勢おられます。このような方々は、私などよりも遙かに辛い現状に身を置いています。なんら苦勞すること無しに、運のみで富と権力を得ることは大きな抵抗を感じています。

先般の奨学金を得て、現在の大学の先生に巡り会えた事例とは異なり、此度の出会いには、私の努力によつて出会いが切り開かれたという必然性が存在せず、単に運によつてのみ支配されています。また、私のような若輩では、与えられた厚遇に甘んじ、努力を怠り、次第に初志が薄れていくであろうと存じます。

いずれ、私が何事かを成し遂げ、名をあげ、自らの実力によつて、閣下に拝調する機会あらば、その時こ

で此度の御礼に日本の館を同封致します。末筆ながら、閣下の御健康と台湾の弥栄を祈念しております。

謹白

平成二十一年三月十二日

込められた「日本精神」

この一通の手紙には、台湾訪問の状況とお礼が礼儀正しく述べられております。日本におけるエネルギー再生の研究に、数々の困難と苦勞がある中で、この若き青年はそれをよく突破して、かなりの成果を挙げています。

彼の心には、日本という小国、そ

そ閣下の御支援を賜り、エネルギー再生の潮流にこの身を投じることが天命であると存じます。

今、この大空へ飛翔していく機を逸することは、私の人生にとつて機を逸することのみならず、寧ろ大きく後退することは重々承知しております。今後、生涯を通じて、これほどの絶好機は二度と訪れないでしょう。然れども、私にとつては、人生の成功よりも、日本人としての誇りと志を堅持することこそが本懐であります。

報恩を尽くす

某先生からは日本独特の思想が理解できないと伺いました。閣下に於かれましても、私の心の内を察することは難しいかと存じます。おそらくは、日本人の精神性に深く関係しているのかもしれませんが。

閣下の御意向に沿うことができず

の将来社会の人々、同じ研究に従事している先生、同僚への感謝が充分に述べられています。彼によつて、表現される日本精神を述べてみましょう。

①日本を数千年にわたつて、しっかりと根幹から支えてきた、気高い形而上的価値観や、道徳観を、彼は充分に持っていたことです。国家の将来に関心を払い、消費に甘んじながら、人間として、どう生きるべきかを教えてくれました。

公に奉ずる精神を第一に、個人の栄譽を捨てる考え方は、日本人でなければできないものです。

誠に申し訳ありません。何卒、私の心情を御理解頂きたく、御願い申し上げる次第です。今後、台湾に常駐することは叶いませんが、教授から受けた恩に報いる為にも、できうる限りの支援は惜しまない所存です。

半年に一度か、一年に一度は、台湾の研究室を訪れ、実地に於いて協力することもあろうかと存じます。僅かながら私の貢献が閣下の御希望を満たすものであれば、望外の喜びです。

若輩たる私に台湾に来るよう、閣下より直々にお言葉を頂戴しましたことは、生涯忘れません。今後、閣下のみならず、御家族、御関係者、また台湾国民の方々に対して、このご恩に報いていくことを、ここに堅く誓約致します。日台友好に微力ながらも尽くして参りたいと存じます。

此度の過分な歓迎は、誠に恐縮の限りです。厝越ながら、粗品を承知

②自国の文化に対する貢献に、進歩と伝統が充分に表現されています。日本精神の本質としての公儀がよく表れています。

③人類社会は、好むと好まざるとにかかわらず、「グローバルイゼーション」の時代に突入しております。このような大状況の中で、ますます「私は何者であるか」というアイデンティティーが重要なファクターになってきています。

この意味において、日本精神の持つ道徳体系を、彼が持っているというところで、日本の将来は頼もしいものであると私は信じております。

あなたの夢は、社会に実る。

置くだけで イメージアップ 「夢の自販機」



1本につき10円を
社会貢献に寄付!

2 社会貢献をPRする
ことで好感度アップ!

3 設置すると日本財団
HPでご紹介!

4 設置・置き換え無料!

ゆめちょ 検索

お問い合わせ先
03-6229-5111

夢の貯金箱
日本財団寄付プロジェクト

日本にはなぜ李登輝氏のような政治家が出ないのか。

緊急大特集 李登輝氏（元台湾総統）が語る

りとうき
台湾前総統。一九三三年台湾生まれ。台北高校卒業後、京都帝国大学中退。台大公学卒業。米コーネル大学文学博士（農業経済学）。台北市長などを歴任したのち、李登輝総統（当時）から八四年副総統に指名される。八八年蔣経國の死去とともに総統に昇格。一九九六年初の総統選挙で大勝。二〇〇〇年五月総統を退任。著書に「武士道」精神（小学館文庫）、「最高指導者

今、日本に

李 登輝
元台湾総統

必要な指導者とは

権力は人民からの借り物

残念ながら、今の日本には国を愛し、同胞を愛する政治家が不在です。また、国民もどのような指導者を求めているのか分らない部分があります。

今の日本を見ていると、政治に挑む人間が、いかにして権力を手にするか、ということばかり考えていて人民や国のことが頭に入っていないように見える。しかし、「権力」というのは権力者のものではなく、何か決定を下す時に人民から借りて、そのあと返すものなのです。そのことがわかっていないかどうか。

そこで、私の指導者としての経験をお話することで、日本の皆さんに「今、どのような指導者が必要なのか」と問いかけてみたいと思います。

私が国家を背負った大事な場面で決断を下す時は、もちろん一人で決めてきました。しかし、昔、中国の皇帝が言っていた「**孤人**（**孤独な人**）」とは違います。私はキリスト信徒ですから、常に対話し、祈り、判断をしてくれるイエス・キリストの存在があるのです。だから決して孤独ではない。自己とキリストとの対話が重要なのです。

私は現在、「李登輝学校」を主宰しており、二十五人程度の若者を集めて、指導者となるべき人材の訓練をして



96年3月、初の直接総選挙で大勝利を収めた（写真提供／共同通信社）

その決意の下、私が徹底してやってきたことは、いかにして台湾の主体性を作り上げるか、ということでした。ここ数年間は時間を失ってしまったような状態ですが、政治とはそういうものだとも思います。

台湾に生まれ

た悲哀を思うとき、私がいつも心に思い浮かべるのは、バイブルの「出エジプト記」です。エジプトの人間はかつて奴隷にされ、それによって自分たちの祖先がアブラハムであり、アブラハムが信じた神

ことをやり、やれることはできるだけやりました。官僚や法律に縛られず、「これだけの権力を与えられたのだから、古い習慣、古い規則を破らなければ」という決意でした。

また、権力は人民のものであり、仕事をするために人民が貸してくれているものです。仕事が終わったら、人民に返す。そのために、人民がどのように考えるかを頭に入れて判断をすることが大切です。

これまで私は「李登輝はどうも変化しやすい」などと

います。準備委員として台湾神学院の院長や、禅の協会で会長を務めている男性を招聘（しょうへい）しました。ですから科目の中には宗教の授業もあれば、坐禅も五日間組む。指導者には精神的な支柱を養うことが必要ですから、なんらかの宗教、信仰をもつことも大切です。

そして指導者には、精神的な支柱や価値観とともに、実行能力が必要不可欠です。口でどんなに立派なことを言ったとしても、正しいと思つたことを必ずやりぬくことが大切です。井尻秀憲さん（東京外国語大学教授）が書いた本のタイトルも、「李登輝の実践哲学」と「実践」を強調しています。

過去の歴史を知り、自分で学び、経験し、学んだからには必ず実行する。それが「実践哲学」です。

そして指導者になつたら、邪な心を持つてはいけません。「私」を持つていてはいけません。ですから、私が信条にしていたのは「私は私でない私（我是不是我的我）」であるということです。

いわれてきましたが、目標がハッキリしているから、変化していく状況に適応しているだけなのです。それは「ブレ」ではありません。私はずっとそう考えて判断してきましたから、たとえ自分の親父が何を言おうと聞きません。親父は昔、県議会議員をやっていましたからいろいろと口を出してきましたが、「余計なことを言うな」と言い続けてきました。家内も政治に対する私の態度を見て「この先生は怖いな」と思っていたでしょうが、このことに関しては仕方がありません。

また、政治家たるものカリスマ的な真似をして人民を扇動してはいけません。人民に対しては正直に、裏面目に話を聞かせることが重要です。

そしてもう一つ大事なことは、私が中学生時代からの経験として実践していることです。人がやりたがらないことこそ、自分がやってみることです。やってみなければものごとはわかりません。私が学寮にいた頃は、毎朝七時に起きて便所掃除をやりました。黄色く汚れていた朝顔を真っ白に磨くことができると、とても嬉しかったです。そういう習慣が残っています。

台湾に生まれた悲哀

私が要職についてからも、誰もがやりたがらなかったがエホバだったことすらも知らない。そういう人間ばかりをモーゼは連れ出したのです。

そしてモーゼはシナイ山で神から十戒を与えられ、それによってモーゼは人々に道徳を説き、四十年もかけて約束の地であるカナンを目指すのです。

民主的な問題は今も昔も全く同じで、大切なのはアイデンティフィケーション（人民の一体感）。人民の教育なのです。今の日本では、その教育ができていないでしょうか。

日本統治時代の台湾は日本の教育、西欧的教育を施され、日本人らしい実直さや文化、道徳を教わってきました。私自身も二十二歳まで日本人として、日本教育を受けたんです。ところが戦後、大陸から人々がやってきた時に、ギャップが生まれました。その結果が、二・二八事件でした。

二・二八事件は一九四八年二月二十八日に発生した、大規模で、台湾にとつては決定的な大事件です。

前日の二十七日、闇タバコを売っていた本省人の女性に対して役人が暴行を働いたことによって、翌日から本省人によるデモが行われました。これに対し憲兵が発砲。大規模な混乱が発生したのに対し、国民党政府は大陸から軍を呼び寄せ、武力で鎮圧したのです。

その背景には、日本統治時代に身についた道徳と全く反する、大陸からの外省人による腐敗政治がありました。本省人にとって、このような状況には耐えがたいものがあつたのです。

「脱古改新」を目指す

それから四十年間の長きにわたり、台湾では戒厳令が敷かれ、本省人が厳しい言論統制下におかれ、多くの人々が投獄、殺害、処刑されました。

私はこの白色テロを「文明の衝突」と呼びました。台湾と大陸では文明が違うのです。そのことを目の当たりにした国民党政府は、日本教育を徹底的に叩く必要があると考えたのです。

そして台湾では徹底的な排日教育、排日統制が行われました。日本語を話してはいけません。日本の新聞や雑誌を読んではいけない。おかげで二十二歳まで日本人だった私も、こんなに日本語が下手になってしまった。

代わりに入ってきた中国の教育で身にしみたことは、中華帝国の歴史では「託古改新」が全てであり、抜本的な改革は行われない、ということなのです。

中国五千年の歴史上、政変があつたのは僅か三回です。一度目は秦の始皇帝の祖父に当たる孝文王が起こし

なければ重要な会議にも出られないという状態でもありました。それに、蔣経国について政治を学んだことは大きかつたのです。

その後、台北市長を経て、副総統に就任します。在任中の一九八八年、一月十三日に蔣経国総統が亡くなり、副総統だった私は総統になりました。

宋美齡との対峙

その直前、一月一日に蔣経国総統は台湾にとって重大な仕事をなし遂げています。それがあの二・二八事件以降、長らく敷かれていた、戒厳令の解除です。これがあつたおかげで、私は「総統として色々なことができる」と考えました。

しかし当時、私の手には軍隊も労務関係もなかった。そこで蔣経国総統が亡くなってから、毎日彼の霊前におまいりに行き、「総統のやってきたことを継続します」と祈り続けたのです。

喫緊の課題は、軍隊を国民党軍から台湾国軍にいかにして切り替えるか、ということでした。そのためには、組織や規約を変えるよりも、人間を入れ替えることが大切です。そこで私は、それまで八年半も参謀総長をやつていた人物、かくはくそん 郝柏村を国防部長に昇進させました。

た「ロウアイの変」。二つ目は清朝時代に日本留学組が憲法を取り入れようとしたが、結局できずに終わってしまった。三度目は孫文です。「主権在民」といいながら、一つも実行できなかった。権力を握つたものが、古代、中世の皇帝と同じかそれ以上の圧政を行う。中国大陸はその繰り返しで、そして台湾にもその手を伸ばしてきたのです。

しかし、台湾は決して「託古改新」ではない。「脱古改新」をしなければなりません。いかにしてこの「脱古改新」を成し遂げるか。私はこの「脱古改新」を政治のモットーとして掲げたのです。

私が実際にどのように政治にかかわっていたか、少し説明しておきましょう。

私は一九七一年に国民党へ入党しました。当時行政院副院長だった蔣経国に呼ばれたのです。六七年頃から台湾では農業問題が深刻化していたのです。農業を専門に研究していた私は、どうにかして台湾の農民が息を吹き返すようにしなければ、と思つていたところでした。

軍隊も党派もない私が入党から六年間、「国務大臣」として加速農村建設計画、労働者の職業訓練、石油化学発展計画の三つを柱として進めていきました。

私は国民党が好きではなかったけれど、国民党に入ら

国防部長のほうが地位は高いのですが、予算や人事が主であり、直接的に軍の実権を握っているのは参謀総長だったからです。

すると、その人物は蔣介石の妻で、蔣介石の死後も政治的影響力を持っていた宋美齡に訴えたのでしよう。宋美齡に呼び出されて、「参謀総長を追い出そうとしているが、台湾海峡は今まさに穏やかでなく、今参謀総長を交代させれば、この難局は打開できない」などと懇々と説得されました。

しかし、軍隊ではどんな優秀な人材が出てくるのです。にもかかわらず、一人の人間が八年も同じポストに座つていたら、優秀な人間はそのポストを素通りしてやめていかなければならない。非常にもつたない。しかし国防部長になれば、優秀な人物が参謀総長に座ることができる、と私も言いました。

すると、宋美齡は「ブリーズ、ブリーズ、リッスントウ、ミー」と英語で言いながら、人事を指図する。彼女には、総統である私に命令する権利はないのですが、ほとんど命令に近い要求をしてきたのです。

しかし、私はその要求を跳ね除けました。参謀総長を国防部長に昇進させ、その後国民党代表大会の選挙を経た後、正式に第八代総統に就任した時には、その彼を国防

部長から行政院長にさらに「昇進」させたのです。

それでも彼は、行政院長の立場で軍事会議を聞かせる、などと無理な要求をし、私が止めてもなおも軍事会議を開こうとしてきました。すると立法院の委員から追及され、大問題に発展しました。

初の直接総統選挙を実現

その時にちょうど立法委員の選挙があり、行政院長は新しく選出された立法委員の同意を得なければ就任できないのですが、その前に総統である私が任命する必要がある。誰を任命するか、私がギリギリまで黙っていると、彼から猛烈な抗議があった。激しいやりとりを交わしましたが、私には任命権があると云って怒鳴りつけました。大変でしたが、これによって徐々に軍は国民党軍から、台湾国軍となり、軍の中立化を成し遂げることができたのです。

そして一九九二年には刑法を改正して言論の自由を認め、一九九六年、台湾で初めての総統直接選挙を行い、第九代総統に就任しました。この選挙も国民党内から散々批判されましたが、そんな罵倒には乗りません。

そして二〇〇〇年、十二年つとめた総統の座を降りました。私は、自分が総統になった際の目の下の命題である

九氏を総統に選んだ。しかし、決して人民は馬英九総統に台湾の主権放棄の権限を与えたわけではありません。

先ほども言ったように、権力は人民からの借り物であり、常に人民の思いを汲みながら決断を下し、あとは、人民に返さなければならぬのですから。

同胞愛と実践哲学

そして今、台湾だけでなく、日本の政治も、大きく揺らいでいます。

こんなことを言うのはおかしいかもしれませんが、もし私が日本の総理大臣になってくれといわれたら何をやるでしょうか。

今、日本国民が悩んでいるのは経済です。その問題を解決するために、まずは日銀の理事会を改編し、総裁を内閣の一員にします。

以前、何かの会で日銀の為替局長と話す機会があったのでこの話をしたら、「なるほど」と言っていた。しかし、日本の為替を調整しようにも理事会が握っているのだという。いま日銀は理事会によって方針を決めており、人民や政治に関与せずにやっているようですが、これを早急に変える必要があります。

みずほ銀行の台北支店長とお話した時に、「銀行の

民主主義を根付かせることができたと考えたからです。そして、在任中に憲法を修正し、「台湾省」もなくなりました。私たち台湾は、言うまでもなく中国の二省ではないのです。

しかし、現在の馬英九総統はどうか。十一月二十一日には、広州で行われていたアジア大会で、テコンドーの台湾代表選手が失格になった問題に関連して、自らデモをやると言っていました。

しかし、あれは結果的に自分自身を攻撃していることになる。デモをして抗議の声を上げるのではなく、解決に向けて動くのが総統の立場であるはずですが、何もせずただ抗議の声を挙げていても、人民に向けて単なるアピールをしているだけに過ぎない。

しかも馬英九政権発足後、台湾の民主化は危機に直面しています。馬英九政権は経済交流を名目に中国に近づいていますが、これは中国が目論む「統一化」に自ら吸い込まれていっているようなものです。

総統直接選挙の実現により、台湾の民主化は強化されるはずでしたが、現在はむしろ後退の危機に見舞われています。

しかし、台湾の前途は二千三百万の台湾人民によって決められるべきです。たしかに、人民は総統選挙で馬英

お金はどこから来るのですか。利息はゼロなのに預ける人がいるのですか」と聞いたなら、彼は「やはり安全だ」ということで、みな銀行に預けていますよ」と言っていた。

この各個人の固有財産は日本の場合、世界的に見ても非常に大きい。この財産がうまく利用されれば、もともと日本経済はよくなるでしょう。今の二、三％の成長では人民がかわいそうだ。

人民の苦しい思いを解決することが、指導者が当面やるべき第一の仕事です。人民の苦難を汲み取れない、同胞愛のない指導者では国は滅びます。そういう気持ちを持って、政治を行わなければなりません。

そして大局においては、アメリカに使者を派遣し、憲法を改正します。私は「憲法論議もできないようでは、日本は沈んでしまふ」と言ってきました。国家の基本である憲法を修正することが第一です。

「李登輝は変化しやすい」などとも言われましたが、私にはずっと目標がきちんと見えていた。それは台湾の民主化です。それさえ見えていれば、環境や状況の変化に合わせて政治が変化するのは当然です。

日本の政治にも、国家の目指すべき方向を明確に打ち出し、同胞愛を持って政治を実践していく指導者が求められているのではないのでしょうか。

WILL

花田紀凱 責任編集 2011年2月1日発行
月刊ウイイル (毎月1回26日発売) 通巻74号
http://web-wac.co.jp

新春超特大号

2 2011
FEBRUARY



たかじんの「超・天皇論」やしきたかじん

北岡伸二「日中歴史共同研究」大批判 西尾幹二が

ドラクエXをやりながら死にたいね

すぎやまこういち 淡路恵子

失言、暴言、菅、失禁内閣だ(笑)

荻原 堤 堯
問答 久保絃之

「暴力装置」発言は仙谷の民か
胡錦濤が北海道を狙っている
日本を救う四つの成長戦略
TPPで日本のコメは再生する
度し難い軍事音痴、民主政権

渡部昇一・桜林美佐

北康利・坂根正弘

浅川芳裕

有本 香

小林よしのり

遠藤浩一

西尾幹二

中西輝政

日本と中国、二大いなる悲劇
三島由紀夫と日本の核武装

総力大特集150ページ 2011年、日本の危機

李登輝が語る ①尖閣問題 ②日本の政治

中嶋嶺雄

WILL
マンスリー
ウイイル

2011年2月1日発行(毎月1回26日発売)
通巻74号

2011年2月号 特別定価780円 本体743円

雑誌 18397-2
Printed in Japan 大日本印刷株式会社

士。

袖を通せば、
この国のモノづくりへの誇りを
身体に感じる服。
D'URBAN 40th Anniversary

日本を着る。

D'URBAN

www.durban.jp



4910183970211
00743

李登輝が語る

①今、日本に必要な指導者とは……
②尖閣は日本の領土だ……
③日本の若き研究者からの手紙……

(聞き手)
中嶋嶺雄

日本と中国「大いなる悲劇」

中西輝政 50

三島由紀夫と日本の核武装

西尾幹二 86

民主政権が犯した

五つの大罪

遠藤浩一 66

TPP農水省試算

五つの嘘を暴く

浅川芳裕 76

失言、暴言、妄言……

菅、失禁内閣だ(笑)

荻原 堯
久保絃之 100

「暴力装置」発言は

小林よしのり 193

仙谷の民が

国会議員の劣化

高森明勅 198

「皇室への非礼」

高森明勅 198

度し難い軍事音痴

渡部昇一
桜林美佐 206

民主政権

胡錦濤が北海道を狙ってる

有本香 218

石垣島を見殺しにする

朝日新聞の妄言

山際澄夫 234

日本よ「ダントツ」成長を目指せ

北康利
坂根正弘 242

やしきたかじんの「超・天皇論」

276

新春特別対談
ドラクエXをやるまでは
死ねないわ(笑)

淡路恵子
すぎやまこういち 226

シリーズ現代史を再見す⑧

北岡伸二「中歴史共同研究」

252

徹底批判②

西尾幹二／福地 惇／福井雄三／柏原竜一

本家ゴーマニズム宣言

①東浩紀氏の中国論に異議あり！ 小林よしのり 177
②「ゴー宣道場」は女の時代の幕開け

〔読者から〕

308 〔編集部から、編集長から〕

311

BOOKS & MAGAZINES

石井英夫の今月この一冊
黒岩祐治「黒岩の法則」
堤義典の今月この一冊
松本健一「明治天皇という人」
編集部の今月この一冊
早稲田古本劇場 第七十四号
「貸した本の行先は」
向井透史

146 144 142 140

CINEMA

秋山登の今月この一本
フーシヤル・ネットワーク他六本

166

連載

シンボルズ……みうらじゅん
大衆芸能小僧 高田文夫・佐野文二郎
すべてはいつか、笑うため。岡 譲道
イカの筋肉……高野ひろし

164 162 160 153

HEADLINE

繁栄のヒント……日下公人
永田町コンフィデンシャル 九段靖之介
常識のためのサブリ……屋山太郎
しよせんヒトゴト……オバタカズユキ
判 決……いしかわじゅん
世界の常識を疑え……G・ボグダン
ヒットの予感……秋元 順

27 26 25 24 22 20 18

MEDIA WATCH

あっぱれ！築地をどり……勝谷誠彦
電脳三面記事……蛭 芸子
テレビ捜査班……水島 総
今月の朝日新聞……本郷美則

136 132 130 128

小説家の身勝手

曾野綾子 121
描はなんでも知っている
佐藤 優

170

日本原論 爆笑問題
まさにフルボッコ状態

148

私と靖国神社
軍馬・軍犬にも合掌

島村洋子 156

昭和を影ったスーパースター伝説
打撃の神様・川上哲治

羽佐間正雄 286

ある編集者のオデッセイ 第12回
北京の街を歩きながら 堤 堯 296
考えたこと④